

ベケットについて

大 賀 淳

1950年代後半から、ベケットの作品が日本にも紹介され始め、世界的にもその演劇が到る所で上演されだした。多くの作品がフランス語で書かれ、時には文法の諸事項を充たさないような、在来の文体を成さない表現で我々を驚かせた。

いわゆる筋の通ったというような筋（プロット）も無い、時も處も不明な、また登場人物も社会的、日常的な定型を持たない不浪者のような、あるいは生者なのか死者なのか、あるいは完全な肉体的存在なのか、不完全なある意味では此の世のものではない存在なのか、わからない人物達が登場する。

殆ど日常的な意味での動きのない静止的な（例えば何かを待って待機しているような）舞台が続くものであった。

原文にあたって辞書を引いても仲々解読できない困難を強いるものが多かった。

1906年、アイルランドのダブリン郊外フォックスロックの中流階級の家
に生まれたベケットはダブリンの名門トリニティ・カレッジに入学し、ボ
ードレーンやダンテや哲学を学び研究者になるものと周囲に期待されて
いたという。1927年、優等で大学を卒業すると、トリニティ・カレッジ
からパリの高等師範学校に英語講師として派遣されるという名誉を受け
た。

1928年から1930年までパリに滞在中、既にパリに住んでいた先輩の
ジェイムズ・ジョイスに会うことになる。二年後ダブリンに戻り、
プルーストについて修士論文を書いたり、『ル・キッド』という寸劇
を書いたり、翻

訳をしたり、『蹴り損の刺もうけ』（後の1934年出版）を書いたりした。

その後1937年パリに戻り、第二次世界大戦に遭遇する。中立国アイルランドの国籍のベケットであったが、ナチスの暴虐を見かねレジスタンス運動に参加した。

その間、『ワット』を書き、戦後1953年になって出版された。

第二次世界大戦が終わると1946年から1950年の間に『ゴドーを待ちながら』を始め、散文の三部作『モロイ』、『マロウンは死ぬ』、『名づけえぬもの』等、次々と作品がフランス語で書かれることになる。

何故フランス語で書いたのかという質問に対して、いろいろな批評家に次のように話している。^(註1)

ハーバード・ブラウには「フランス語は適切な弱音器的な効果がある。」と。

リチャード・コウには「英語だと思わず詩を書いてしまうので怖い。」と。

ニクラウス・ゲスナーには「フランス語の方が文体なしで書くのがやさしい。」と。

イズラエル・シェンカーには「フランス語に変えたのはただそうしたくなったからだ。フランス語で書く方がわたしには刺激的だったのです。」と。

こうして我々はフランス語のテキストに直面して面喰うことになったのであった。

また、先輩のジェイムズ・ジョイスやサルトルの影響があると取り沙汰されたり、人見知りして世間に出たがらない性格から、世間とあまり交渉が無いと言われているうちに、1969年ノーベル文学賞を受賞し、脚光を浴びることになる。

ベケット自身、自作を演出したりすることが多くなり、いろいろな人々と対談したりして、自分の作品の深部——即ち何を表現しようとしている

のかを、ぽつりぽつりと語り出すが、それを読んでも仲々理解し難いものであった。

いろいろ評論が書かれ、論争が行われたが、いまだに、その本当の所は理解されるに到っていないと私には思われる。

研究者として勉学し、西欧の学問・芸術に深い理解を持っていると思われるベケットを、その『プルースト論』などを読むと、この知性を高く評価できるように思われるが、ベケットの作品には、こういう先人の学問(哲学)・芸術などが、揶揄され、戯画化され、茶化され、ときには愚弄されて断片的に引用されたりするのを見ると、ベケットの抵抗的・破壊的・否定的な面が、何か人を無意味なものへ、救いようのない奈落へ突き落とすような世界観・人間観が妙に気になり出すのである。

三十数年前から数年間、「不条理の文学」の系譜に興味を引かれ、ベケットの作品をあれこれ読んで、二・三小論を書いたが、それは凡ゆるものが死滅し、破滅し、亡びゆく宇宙の中に、塵り芥のように無意味に存在している人間が、時には何かを待ちながら(神かあるいは宇宙の攝理か)、時にはその期待も殆ど意識しなくなった存在として描かれている、終末の世界を表現したものと受け取った。

それから三十数年近く、ベケットに注意しなくなっているうちに、ベケットはノーベル文学賞を受賞していたのであった。

しかし、最近その作品を通観しているうちに、少しベケットがわかったような気がしたのである。

結論を先に書くと、それはベケットは「意識」の永続性を演劇を通じて、いろいろの角度からいろいろと試み、どうかして表現しようと苦心したのではないかということである。

サルトルが考えたようにこの唯物的宇宙には出口はない。それは刻々と変化し、死滅へ向かっている。次第に光を失い、生命の無い灰色の土塊のようなものから闇へと変化しつつある。息のつまるような閉ざされた世界

である。こういった世界において、ベケットの登場人物達が語り出す。語り出すというのは人間の意識が声となって流れ出すわけである。

このように「意識」はこの閉ざされた空間の中で出口を求めてさまざまに歩くのである。

イノック・ブレイターによると1985年ベケットは「わたしは明るい所へ出て来たくて『ゴドー』を書きました。息のつける空間が必要だった。それを舞台の上に見つけたのです。」^(註2)と。

ベケットは息のつける空間、いわゆる存在し、表現しようとする「意識」の安らぎを見出そうとしたのである。

『ゴドーを待ちながら』では、薄暗がりの道端に山高帽を被ったヴラジミールとエストラゴンが坐っている。——ヴラジミールが「木だけが生きている」と云う、生命を象徴していると考えられる、一本の木が立っている。

彼等は、論理性や、連続性の希薄なとりとめのない会話を交わすが、これはとにかく「意識」が常に働いていることを表している。

これが、方向性を持たずに絶えず流れ出す意識^(註3)とサルトルが考えたような「意識」の状態である。

ベケットの描く人物は過去だけを背負った人物達である。時に何かを期待して、散文の三部作では行動することがあるが、彼等は朦朧とした意識の中ではっきりとは自覚しないから、新しい興味とか何かを意識して——方向性を持たせて——「意識」へ取り入れようとはしない人物達である。「意識」の中に記憶されたものを吐き出すだけである。それは時間的順序も、論理的秩序も何もない。選択する意識も無いから無秩序で、聞き手にとっては支離滅裂である。

プルーストのように、ある香りとか光とかを契機として、蓄えられた過去が秩序をもって吐き出される時、我々には理解し得るわけであるが、ベケットの描いた世界は灰色のもう滅亡しかけた廃虚のような世界であるか

ら、外界からの契機は与えられようもなく、この人物達は流れ出ようとする意識へなんらの加工も加えずに任せるのである。まるで潜在意識のみの人達のようなのである。

現在意識と潜在意識の区分がどのように区別されるのか境界があるのかは不明だが、現在意識が覚醒している時の意識であるとする、ベケットの人物達は現実には目覚めていない、即ち寝ている夢中の人物達なのである。

『ゴドーを待ちながら』に「わたしは眠っていたのだろうか。……今でも眠っているのだろうか？あす、目が覚めたとき、きょうのことをどう思うだろう。人はゆっくり年をとる、あたりはわたしたちの叫びでいっぱいだ。だが習慣は強い麻薬だ。わたしだって、誰かほかの人が見て、言っている。あいつは眠っている、自分では眠っていることも知らない、と。これ以上は続けられない。わたしは何を言っているんだ？^(註4)」とヴラジミールの科目があるが、これはやはり夢中の「意識」である。このように現実に目を向けて、即ち現在を生きて何かを認識しようとする意識を持たない人物達である。過去に彩られた「意識」が流れ出すだけであるから、今を認識し、未来を動かそうとはしない。あるいはそれを拒否しようとしているかに見える人物達なのである。

『ゴドーを待ちながら』では人物達は何らかの期待を持っているようである。それが何なのであるのか、彼等は明確に意識していないが、それは彼等を彼等の現状から解放あるいは変化させてくれるような何者かであるに違いない。やがてポッツォとラッキーが現れるが、何も変化をもたらさずはしない。人生はそういうものだと言っているように思われる。

この作品にはまだ薄明りと、何らかの期待が仄めかされており、世界中で上演されたのであるが、これと同時期にベケットは散文で『モロイ』、『マロウンは死ぬ』、『名づけえぬもの』の三部作を書いた。

散文では、登場人物達、またその存在する空間、またその筋（プロット）

は全て書き言葉で表現されなければならない。

ベケットにとって、『ゴドーを待ちながら』で表現した世界を、これら散文では、言葉の面でいうなら、前述の人物達・空間（舞台）・筋といったものを三倍も苦勞して、書き言葉で表現しなければならないわけである。

「意識」はその存在を表現しようとする時、言葉を使わなければならない。あるいは image（映像）——夢など——使わなければならない。演劇では登場人物の発音する語り言葉であり、空間としての舞台である。

散文ではこれらを全て書き言葉で表現しなければならないのである。

ベケットが自分の「意識」の世界を表現しようとする時、あのようないわゆる時間的順序・空間的秩序・筋の一貫的連続性というものの無い無秩序で不条理な世界を展開することになるのである。

『名づけえぬもの』^(註5) (L'INNOMMABLE) の最後に次の文章がある。ベケットの文体を見てもらうためにフランス語を引用する。

…Ce sera moi, ou rêver encor, rêver un silence, un silence de rêve, plein de murmures, je ne sais pas, ce sont des mots, ne jamais me réveiller, ce sont des mots, il n'y a que ça, il faut continuer, c'est tout ce que je sais, ils vont s'arrêter, je connais ça, je les sens qui me lâchent, ce sera le silence, un petit moment, un bon moment, ou ce sera le mien, celui qui dure, qui n'a pas duré, qui dure toujours, ce sera moi, il faut continuer, je vais donc continuer, il faut continuer, je vais donc continuer, il faut dire des mots, tant qu'il y en a, il faut les dire, jusqu'à ce qu'ils me trouvent, jusqu'à ce qu'ils me disent, étrange penine, étrange faute, il faut continuer, c'est peut-être déjà fait, ils m'ont peut-être déjà dit, ils m'ont peut-être porté jusqu'au seuil de mon histoire, ça

m'étonnerait, si elle s'ouvre, ça va être moi, ça va être le silence, là où je suis, je ne sais pas, je ne le saurai jamais, dans le silence on ne sait pas, il faut continuer, je ne peux pas continuer, je vais continuer.

(それはわたしだろう、あるいはまだ夢を見る、沈黙の夢、つぶやきにみちて、わたしにはわからない、それらは言葉だ、決して私を目覚めさせない、それらは言葉だ、それしかない、続けなければならない、それが私の知っている全てだ、彼等(言葉)は止まらないだろう、わたしはそれを知っている、わたしは私から漏れる言葉を意味している、それは沈黙だろう、ほんのちょっとの間、少しの時間、あるいはそれが私のものだろう。続くところのもの、続かなかったもの、いつも続いているもの、それが私だろう、続けなければならない、続けられない、続けなければならない、だからわたしは続けよう、言葉を言わなければならない、それ(言葉)がある限り、それ(言葉)を言わなければならない、彼等(言葉)がわたしを見つけるまで、彼等(言葉)がわたしのことを言うまで、奇妙な刑罰、奇妙な過ち、続けなければならない、恐らく既に言ってしまったのかな、恐らく彼等(言葉)は既にわたしのことを言ってしまったんだ、恐らく言葉はわたしの物語りの敷居ぎわまでわたしを運んだんだ、わたしの物語の始まる戸口の前まで、わたしは驚いてしまうだろう、もし戸口が開いたら、それはわたし自身であるだろう、それは沈黙であるだろう、そこにわたしはいるんだ、わからない、わたしは決してそれがわからないだろう、沈黙の中では人はわからないものだ、続けなければならない、続けられない、続けよう。)

一読意味不明な、難解な科目であるがここには、ベケットの作品についての本質的で重要なことが言われているように思われる。

ここで、ベケットが言葉といているのは「意識」のことである。「意識」のある限り、それを何らかの形で表言しなければならないのである。ベケットは彼が欲すると欲せざるとに拘らず、「意識」が存在し続けることを〈étrange peine, étrange faute〉〈奇妙な刑罰、奇妙な過ち〉と表現し、自己の存在以外の大いなる存在を暗示し、自己が愛身的に存在せしめられて、その存在を継続しなければならないことを言っているのである。

この中でベケットが〈mon histoire〉というとき、それは彼の人生のことであろう。

それであるから『ゴドーを待ちながら』でヴラジミール達が何かを待っているのは、彼等を存在せしめた何かを待っているのである。

ベケットは西欧の凡ゆる哲学に通じ、作品の中に茶化したり戯画化したりして取り入れていることは前述した通りであるが、リチャード・コーの『ベケット論』^(註5)によると、そうした先人の影響の中でも、サルトルの『存在と無』から二つの特殊な概念を借りて、これらの概念ならびにその結果を彼自身に当てはめているという。それは〈対自〉と〈他者〉である。「仏教徒にとってと同じく、彼（サルトル）にとっても、存在するものはそれが知覚の対象になるまでは、未分化の塊^{マス}り、「充満」として存在しているのだ。精神だけが、例えば机と椅子、一インチと一マイル、赤と黄、などを識別できるのであり、しかも否定することによってそうしているのだ。……精神のみが「ピーターはそこにはいない」と言うことができるのであって、「塊状」で未分化の宇宙においてこのような陳述をするとしたら、それは馬鹿げていよう。「不在」は事実ではなく精神が創る概念なのだ。自然界には否定はあり得ない。したがって意識とはポジティブにネガティブを附加すること、すなわち、「無化」“néantisation”の過程、に外ならないのだ。宇宙は二つの性質から成っている——塊状をなして存在しているもの（「存在」あるいは「即自」はポジティブであり、存在しているものを組み立てている意識はネガティブである（「無」または「対自」）、と

いう二つの性質から。ここから論理的に対自（否定する意識）はすべて存在の外になければならず、「存在しない」ものだけが存在するものを理解できる、ということになる。対自は〈存在〉ではない、対自は「それ自身の〈非-在〉なのだ。

さらに、ネガティブであるサルトルの〈対自〉は、ベケットの〈自己〉の属性をすべて含んでいる。それは、この世界における因果の条理を免れて自由である。が、他方、それは間断なく自らの〈リアリティ〉を繰り返して作り出すことができる——いわば自らのリアリティについて「作り話」をするのだ、そしてその作り話が存在自体に取って代わるのである。……それは、「わたし」を装っている「非-我」であり、まやかしのものだ。……そして最後に、「対自」は非人称であり、「我思う」から我を分離する。……世界を説き明かす意識は、主語のない意識に外ならない。

だが……その本質的な自己が、わたしの自己と同じく、ネガティブである〈他者〉とは何か？彼は、私の世界のなかにある一対象なのだが、彼の方でも、わたしを彼の世界のなかの一対象にしている。彼は「わたしの世界のなかにある穴……それを通してわたしの世界が漏れ出る穴」なのだ。わたしは無敵なのに、彼がわたしを時空内に据えつける——わたしをピンで留めてしまう。わたしは彼の奴隷であり、彼の目的への一手段であり、さらに（彼以外の人間であることによって）彼が存在していることを彼に立証してやるものである。このような訳で、サルトルの宇宙においては、〈他者〉は戦慄すべきもの、わたし自身の〈対自〉の永遠性と無限性を物質の限界内に閉じ込める暴君、なのだ。「他者こそ地獄だ。」と。そうして、『マーフィー』においてベケットは実存主義成立以前の実存主義であることを示したと述べているが、大へん難解なこの二つの概念をその作品の中で実現しようとしたのならベケットの苦勞は大へんなことであつたと思われる。

意識は存在を組みたてるものであってネガティブ（「無」または「対自」）

であって、全ての存在の外にあると考え、「存在しないものだけが存在するものを理解できるのだ」ということになると、その矛盾にベケットは苦悩のどん底に落ちなければならなかったと思われる。ベケットの作品を読むと、リチャード・コーの言っていることを裏付けるものがあるようにも思われるが、しかし、ネガティブであろうとポジティブであろうと、意識のように表現された瞬間に消えてしまおうと、物質のように無に至るまでかなりの時間存在していようと、共に存在しているわけであり、ベケットの描いた無への過程にある廃墟のような物質的宇宙に「意識」の流れは存続しているという世界は、やはりベケットが物質と精神の二元論の中で精神の永続性を理解しようとしていたのだと思われる。

こうして、ベケットの登場人物達は『名づけえぬもの』の最後の「続けなくてはならない、続けられない、続けよう」のように常に肯定と否定、あるいは確実と不確実の間を揺れて繰り返す言葉を吐くのである。

これはベケットにとっては、自己の存在を見究めようと沈黙考して己れの潜在意識に蓄えられ混在している無数の観念や image や情念を、当てずっぽうに探り出そうとする時、どうしてもそのようになる、計り知れない苦悩であったろうと思われる。

「音楽は純粹な観念である」と言ったベケットは、意識の働きをかなり精密に理解しつつあったのではないかと思われる。

シャルル・ジュリエやイノック・ブレイターのように、ベケットと会い対談した人達の証言^(註7)をみると、ベケットは寡黙で、じっと自分の思考の中に沈潜する人であったようで、サルトルのように唯物論・無神論に固った多辯の人ではなかったから、あのような作品がぼつりぼつりと出来たのであろうと思われる。

流れ出る意識は潜在意識に無秩序に、混在するものとして蓄えられたものであるから、それを表出するとき、現在意識の統制力を持たないベケットの人物達は、前述のように時間的順序も、空間的秩序も、筋の連続的一

貫性もなしに吐き出されるのである。

だから『マロウンは死ぬ』でモロイが「ときにはまるで終ってしまったことのようにそれを語り、ときにはまだ続いている冗談のように話す。それはどちらでもない。なぜなら、わたしの一生は同時に終ってもいるし続いてもいるからだ。そんなものを表すために、いったいどんな動詞の時制があるというのか」と語るのは、そのへんの事情を表したものである。

とにかく意識とその意識に蓄積されて表出を待っているもの、ベケットが自己の内部を見詰めつづけ探り出そうとしているその潜在意識の世界は実在（存在）であるのかどうかという問題と永生の問題である。

イノック・ブレイターによると、1938年のベケットはコリン・ダックワースに次のように語っているということである。

^(註8)「もっと小さな空間のために創作するという必要を感じていました。人物の位置や動きや、とりわけある種の光を、わたしが多小なりとも自由にそうさできる空間ですね。」また『マロウンは死ぬ』と『名づけえぬもの』の執筆の合間に戯曲に取り組んだのは「その頃書いていた恐ろしい散文から逃れて、息抜きするため」だったと。またなぜ小説執筆の最中に戯曲を書いたのかと問われて、ベケットは「別に戯曲を書こうとしたわけではありませんでした。ただそうなっただけです。」と答え、散文の荒地からの休息を求めていたと言っている。また前述したように、1985年には「わたしは明るい所へ出てきたくて『ゴドー』を書きました。息のつける空間が必要だった。それを舞台の上に見つけたのです。」と語っている。

このようなわけで、その後は、ベケットは『勝負の終り』『すべて倒れんとするもの』『クラブの最後のテープ』『しあわせな日々』『芝居』『行ったり来たり』『カタストロフィ』等々、舞台作品や放送劇を発表する。

だんだん短いものになり、空間も廃墟のようなものから姿を変え、もっと極限され、いうならば、自己の外的世界は極端に圧縮され、なくされて無に近づいていくのである。『勝負の終り』では、主人公ハムの両親と思

われるネルとナッグはドラム缶から頭だけ出している。『しあわせな日々』ではウィニーが土に半分埋もれ上半身だけで演じている。『芝居』では骨壺と思われる甕から頭だけを出している。『なに、どこ』ではデス・マスクのような人の顔だけが照し出されている。最後には『わたしじゃない』の「口」だけの演戯者まで舞台上に現われるようになるのである。

イノック・ブレイターは「『マロウンは死ぬ』の世界では不可避免的に死が偽物としてその正体を暴かれる。死とはすべての虚構の書き手に使われる数ある仕掛けのなかの一つに過ぎないのだから。」^(註9)と卓見を述べているが、ベケットの描く世界では生と死の境界も無視されて同時性・同在性として描かれているように思われる。

またイノック・ブレイターが指摘^(註10)するように、ベケットはその『プルースト論』の中で「芸術の向うところは発展ではなく収縮である」と述べているように舞台の道具立ては無に近づくのである。

また1968年10月24日、シャルル・ジュリエ^(註11)がベケットを訪れて対談したとき、しばしば、「老い」についてベケットが語ったということであるが、人間も宇宙もいつかは老衰し滅亡へと導かれる。物質の世界の終局の姿であり、ベケットの描く世界である。

しかし、「意識」はその滅び去った世界でなお存在しているのである。即ち生きているのである。

ベケットはそれを諸々の戯曲の中で、骨壺の中の首だけのように、また「顔」だけや「口」だけのように、象徴的に表現したのである。

恐らく、ベケットは物心二元論の狭間の中で苦悩しつづけているに違いないのである。

「意識」が永遠に生きつづけるのかどうか、そうして、それがどのように存在するのか、その答えを持ち得ないで苦悩しているに違いないのである。

デカルト以来、「意識」の問題は西洋哲学において重要な中心的課題で

あったが、まだその決定的解決はなされていない。

リチャード・コーは『ベケット論』の中で、^(註12)「筆者が、ベケットの〈虚空〉説を神秘的に解釈することを始めからあまり強硬に主張しなかったのも老子や坐禅に見られるちょっとした不合理に巻き込まれずに、同じような結論に達している合理的な哲学がほかにあるからである。」と述べてベケットの苦悩を救い得るものがあることを暗示しているが、リチャード・コー自身が東洋の思想に深く通じているのかどうかは不明であるし、それを引用もしていない。

ベケット自身が東洋の思想に触れていたかどうかについては、シャルル・ジュリエによると、前記の対談の中で、^(註13)「神秘思想家（西洋の）はお読みになりましたか」という質問にベケットは「あ、若いときに。けれど深く掘り下げて考えはしなかった。」と答えており、シャルル・ジュリエは「否。彼は東洋の哲学者や思想家の著作を読んだことはない。」と断言している

私には、仏教の唯識思想はベケットの苦悩を癒すものであり、解決しないとしても、ベケット程の知性がそれに出会わなかったのは残念なことであると思う。

サン・テグジュペリのように「意識は生命である。」と思索した人もあることを知らせたいと思うのである。

〈註〉

- 註1. 『なぜベケットか』 イノック・ブレイター 安達まみ訳 白水社 53頁、54頁、64頁、65頁
- 註2. 同上 65頁
- 註3. 『フッサール現象学の基礎理念』 サルトル
- 註4. 『ゴドーを待ちながら』 ベケット 安藤信也・高橋康也訳 白水社 183頁、184頁
- 註5. 『L'INNOMMABLE』 Les Editions de Minuit. 1949年11月 拙訳 212頁、213頁
- 註6. 『ベケット論』 リチャード・コー 諏訪部仁訳 審美叢書 108頁、109頁、110頁
- 註7. 『なぜベケットか』 イノック・ブレイター
『ベケットとヴァン・ヴェルデ』 シャルル・ジュリエ 吉田加南子・鈴木理江子訳 みすず書房
- 註8. 『なぜベケットか』 イノック・ブレイター 64頁
- 註9. 同上 62頁
- 註10. 同上 63頁
- 註11. 『ベケットとヴァン・ヴェルデ』 シャルル・ジュリエ
- 註12. 『ベケット論』 リチャード・コー 107頁、108頁
- 註13. 『ベケットとヴァン・ヴェルデ』 シャルル・ジュリエ 32頁、14頁